〈もし、その１本松を人間にたとえたとしたら……〉
想像のスクリーンに、擬人化した１本松を写しだしてみました。
すると、８歳くらいの少女の姿がうかんできました。
名前は何とするかな……。
そうだなあ……。　レイラ。
そう、レイラにしよう。
ふだんの私は、小説を書いています。
〈松の木の少女レイラは、なぜ生きのこったのか……？〉
そんなことを考えているうちに、こんな物語がうかんできました。
松の木の少女レイラと家族の物語です。

やがて、別れの時がきました。
海の方へ立ち去ろうとしている家族たちの背中に向かって、レイラは言いました。
「待って、わたしもつれてって！
　おねがいだから、もうこれ以上、わたしをひとりぼっちにしないで！」
家族たちは立ち止まり、レイラの方をゆっくりと振りかえりました。
それから一様に首を横に振りながら、
「それはできないのだよ」
「どうして！」
レイラは叫びました。
家族たちは少し困ったような表情で、おたがいの眼を見つめあいました。
しばらくすると意を決したように、大きくひとつうなずきました。
そうして、あの日あの時、高田松原で何が起こったのか、その一部始終をおしえてくれたのです。

兄弟や姉妹たちも必死でした。
いいえ、家族だけではありませんでした。
高田松原に生えていた７万本の松の木たちは、ひとりのこらず身をよじり、
両腕をいっぱいに広げてスクラムを組み、
レイラを津波から守ろうとしてくれたのです。
「あの娘を、守れ――――――！」
「あの娘だけは、津波から守れ――――――！」